

## 黄檗獨湛の『勸修作福念仏図説』について

田中実マルコス

〔抄録〕

黄檗宗萬福寺開山隱元禪師（以下諸師敬称略）とともに来日した獨湛は、後に萬福寺の第四世となる。獨湛は日本で『勸修作福念仏図説』を上梓し、念仏教化の資糧とした。それは昭和初期まで十刷も刊行されるほど用いられた。『勸修作福念仏図説』の左右には長文があり、その典拠は蓮宗九祖の一人に数えられる明代の雲棲株宏のものであると伝えられているが、今回はそれを証明し、さらに『勸修作福念仏図説』が近世日本の念仏教化にどのような影響を及ぼしたかを考察する。

キーワード 獨湛、勸修作福念仏図説、念仏図説、黄檗、株宏

「念仏図説」は江戸時代に念仏流布のために数珠①のような機能をもたせたところの教化手段であった。念仏を千遍あるいは万遍を称えることに「〇」をうずめるところから「消し念仏」としても知られている②。黄檗山万福寺第四代獨湛の『勸修作福念仏図説』は宝永から昭和初期までにわたって十回印施③されたことが知られ、その受容性がうかがわれる④。

宋代の志磐『佛祖統紀』巻第二十八には念仏図説に関する次のような言及がある。

答定國號省齋。為州學諭。常念佛讀淨土諸經。結西歸社以勸人。嘉泰初於小江慧光建淨土院。結石塔於池心。為鄉民火焚藏骨之所。印施念佛圖。

月二八集僧俗。就淨土院。諷觀經念佛以為常。嘉定四年夢青童告曰。佛令召君。三日當生彼國。至日沐浴更衣。端坐念佛而化⑤。

つまり答定國居士（一二二一）は省齋と号す。明州（浙江省郵県）の學諭（教諭）となる。常に念仏し、淨土の諸經を読んで、西歸社という念仏結社を結び、人々を勸化した。南宋寧宗の嘉泰（二二〇一～二二〇四間）の初め、小江の慧光において淨土院を建立、石塔を池心に結び、郷民の火

焚藏骨の納所とした。また念仏図説を印施した。毎月二十八日に僧俗を集めて浄土院で『観経』を誦誦し、念仏を常に修した。嘉定四年(一二二一)、夢に青童が、「仏が君をよび寄せるので三日にしてまさに彼の国に往生するであろう」と告げた。その日が来ると沐浴して、衣をかえ、端坐念仏して西化した、と述べている。『佛祖統紀』はまた計公とよばれる鐵工の事蹟について次のように述べている。

計公。四明桃源鐵工也。將七十兩目喪明。里中咎學論。以擘窠圖印施勸人念佛。計公初受一圖念滿三十六萬聲。念至四圖兩目瞭然。如是三載。念滿十七圖。一日念佛忽氣絕。半日復蘇曰。我見佛菩薩令分六圖與咎學論。是勸導之首分。一圖與李二公。此是俄圖之人。囑其子往謝學論。言訖沐浴西向坐逝。<sup>6)</sup>

つまり四明桃源の鉄工である計公は、七十歳になろうとする時に両目を失明した。里中の咎學論(定國)は擘窠圖(小圈が連続集合して蜂の巣のようになつた図)を印施して念仏を勧めた。計公は初めにその一図を受け、それを三十六万声で満たし、更に念ずること四図に至ると両目が見えるようになった。このように三年にして十七図を成満した。ある日、念仏中に氣絶し、半日して蘇生して「我れ仏、菩薩を見るに、六図を分けて咎學論に与えさせた。これが図説による勸導のはじまりである。一図は李二公に与え、李二公はそれを更に分与した人である。その子に託して定國の所に行かせ感謝を述べた。」と語った。その後沐浴して西方に向かつて坐して寂したとある。これによって中国南宋時代(一一二七〜一二七九)頃には念仏図説による教化が行われていたことが知られる。<sup>8)</sup>

ところで日本でも獨湛の念仏図説とは別に独自の念仏図説による教化が企画されていた。それについて雲嶺桂鳳は『蓮会百万念仏図説述贊』<sup>9)</sup>に師である雲洞(一六九三〜一七四二)の図説と獨湛の図説について次のように述べている。<sup>10)</sup>

元禄辛巳ノ秋。做<sup>ニ</sup>蓮華會ノ序<sup>ヲ</sup>。且<sup>ツ</sup>設<sup>テ</sup>圖説<sup>ヲ</sup>。一欲<sup>ス</sup>廣<sup>ク</sup>施<sup>サ</sup>于<sup>レ</sup>世<sup>ニ</sup>也。雖<sup>レ</sup>然<sup>リ</sup>恐<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>信<sup>セ</sup>。而<sup>無</sup>藏<sup>テ</sup>而<sup>出</sup>之<sup>ヲ</sup>矣。寶永乙酉ノ春。偶<sup>見</sup>下<sup>ル</sup>黄檗獨湛禪師所<sup>ニ</sup>印施<sup>シ</sup>之<sup>作</sup>福念仏圖<sup>ヲ</sup>。與<sup>ニ</sup>愚願<sup>一</sup>恰<sup>カ</sup>如<sup>シ</sup>合<sup>ニ</sup>符節<sup>一</sup>。因<sup>テ</sup>鑲<sup>レ</sup>梓<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>募化<sup>ス</sup>。所<sup>冀</sup>社友信<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>也。<sup>11)</sup>

つまり雲洞は元禄十四年(一七〇一)の秋に、『丈六弥陀蓮会講百万念仏図説』を作成したが、人々がそれを信受しないことを恐れ世に出さなかつた。しかし宝永二年(一七〇五)の春、獨湛が印施した『勸修作福念仏図説』を見て愚願とあたかも主旨を同じくする念仏教化であると思ひ、図説を印施し、人々を教化した。念仏結社の同行者がこの図説を信受するように願うと述べている。当初雲洞が念仏図説を世に出すことを躊躇したのは念仏図説が未だ日本では流布していなかつた不安からで、ここから獨湛の『勸修作福念仏図説』が日本における念仏図説教化を展開させる先導的役割を果たしていたことが推測される。

『勸修作福念仏図説』では最上段に横書で「勸修作福念佛圖説」と題し、その下にやはり横書きで「南無阿彌陀佛」と記し、中央に雲上の弥陀三尊(阿彌陀仏の胸元に卍が記されている)の立像を配し、その下段に描かれた蓮台の上に「念仏弟子」という言葉が記され、その下に念仏者の姓名を記入で

きる空白がある。また図説の左右には長文があり、その下段には版行の由来と意図が記されている。図説の四方周囲に千余りの白圈（○印）が念珠のように配されている。



勸修作福念仏図説  
(黄檗文華殿所蔵)

江戸中期、法然院の第六世宝洲（一七三八）は東北地方に活躍した貞傳（一七三一）の伝記、『貞傳上人東域念仏利益傳』<sup>12</sup>を編纂したが、その巻下の「作福念仏乃由来」では獨湛図説の左右の長文の典拠について次のように述べている。

蓮池大師の勸修作福念佛図説に依つて百萬聲の念佛に堪て追薦せんはいよいよ佳し。此の図説は曾て黄檗獨湛禪師、先師忍證上人に託して、當山より弘通する所、幾千萬という事を知らず。其本説は雲栖の山房雜録に載る所の骷髏の図説と作福念佛の図説とを合せる者なり。<sup>13</sup>

ここでは獨湛の『勸修作福念佛図説』所載の長文が「山房雜録」に載る所の骷髏の図説と作福念佛の図説とを合わせたものであると述べている。『山房雜録』は雲棲株宏（一五三二～一六一二）の著作でその中に『勸修作福念佛図説』がある、獨湛はそれを引用しているのである。次に上段に獨湛の念仏図説、下段に株宏の『山房雜録』を配し両者を五節に分けて対照してみることにする。

勸修作福念佛圖説 (獨湛)

人天路上<sup>ニハ</sup>作福為<sup>レ</sup>先。生死海中<sup>ニハ</sup>念仏第一<sup>ナリ</sup>。

人間天上ノ快樂逍遙。皆因<sup>三</sup>廣ク作<sup>二</sup>諸ノ福<sup>一</sup>最緊最要。故曰為<sup>レ</sup>先<sup>ト</sup>。

若<sup>シ</sup>欲<sup>ハ</sup>高<sup>ク</sup>出<sup>テ</sup>人天<sup>一</sup>速<sup>ニ</sup>超<sup>テ</sup>生死<sup>一</sup>。

直<sup>登</sup>中<sup>ラ</sup>不<sup>退</sup>則有<sup>ニ</sup>念仏往生ノ一門<sup>一</sup>。最尊最勝<sup>ナ</sup>。故<sup>ニ</sup>曰<sup>フ</sup>第一<sup>ト</sup>。

偈曰作福<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>佛<sup>セ</sup>。福盡<sup>キ</sup>還<sup>テ</sup>沈<sup>淪</sup>ス。

念佛<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>福<sup>セ</sup>入<sup>レ</sup>道<sup>ニ</sup>多<sup>シ</sup>苦<sup>辛</sup>。無<sup>レ</sup>福<sup>不</sup>念<sup>レ</sup>佛<sup>セ</sup>地獄鬼畜<sup>ノ</sup>群<sup>ナリ</sup>。

念佛<sup>シテ</sup>兼<sup>テ</sup>作<sup>レ</sup>福<sup>スレハ</sup>後證<sup>ニ</sup>兩足尊<sup>ヲ</sup>。

勸修作福念佛圖説 (株宏)

人天路上作福為先 生死海中念佛第一人間天上。

快樂逍遙。皆因廣作諸福。最緊最要。故曰為先。

若欲高出人天。速超生死。

者登不退。則有念佛往生一門。最尊最勝。故曰第一。

偈曰。作福不念佛。福盡還沉淪。

念佛不作福。入道多苦辛。無福不念佛。地獄鬼畜羣。

念佛兼作福。後證兩足尊<sup>⑮</sup>。

「人天の道には作福を先となす。生死海中には念佛が第一である。人間天上の快樂を逍遙するには、皆広く諸の福をなすことが最重要である。だからそれを先と為すのである。もし高く人天界を出でて速やかに生死を越えて直ちに不退の境地に登りたければ念佛往生の一門のみがあつて、それが最尊、最勝であるから第一というのである。作福して念仏しなければ、福が尽きればまた六道に沈淪する。念佛して作福しなければ道に入つても苦辛が多い。福をなすことなく、念仏も修さなければ地獄餓鬼畜生の群れに入る。念仏してさらに作福すれば後に仏兩足尊を証す。」と述べている。

ここでは作福、つまり善をなして福德をつむ事によって人界や天界に生ずることができるが、生死を越えて不退の境地に到るには念仏往生が第一であることが述べられている。

この後に獨湛は再び株宏を引用して諸々の福について並べている。株宏の題には「作福とは、ただ一つの福をなすことである。福は下限は一点でもよい、その大小や多少を問わない。」と述べている。対象すると次のようになる。

孝順シ父母一。忠報シ君王ニ。装ニ塑佛像ヲ。印ニ造シ經典ヲ。 齋供僧伽一。敬ニ事シ師長ヲ。營ニ修シ寺宇ヲ。流通シ善法ヲ。 禁絶ニ宰殺ヲ。買放シ生命ヲ。飯食シ饑民ニ。衣濟寒凍ニ。 開掘ニ義井ヲ。修理シ橋梁ヲ。平砌シ街道ヲ。普施シ茶湯ヲ。 看療シ病人ヲ。給ニ散シ藥餌ヲ。伸ニ雪シ冤枉ヲ。出ニ減シ刑罪ヲ。 安養シ衰老ヲ。撫ニ育シ孤孩ヲ。埋ニ藏シ屍骨ヲ。給ニ与シ棺木ヲ。 饒免シ債負ヲ。義讓シ財産ヲ。還ニ他ノ遺失ヲ。救ト濟シ患苦ヲ。 祈禱シ災難ヲ。薦拔シ亡魂ヲ。勸ニ和シ争訟ヲ。生ニ全ス人命 <sup>16</sup> ヲ。	作福 但作一福。福下一點。不論大小多寡 孝順父母 忠報君王 裝塑佛像 印造經典 齋供僧伽 敬事師長 營修寺宇 流通善法 禁絕宰殺 買放生命 飯食飢民 衣濟寒凍 開掘義井 修理橋梁 平砌街道 普施茶湯 看療病人 給散藥餌 伸雪冤枉 出減刑罪 安養衰老 撫育孤孩 埋藏屍骨 給與棺木 饒免債負 義讓財產 還他遺失 救濟患苦 祈禱災難 薦拔亡魂 勸和争訟 生全人命 <sup>17</sup>
--	---

ここでは三十二の福が挙げられている。さらに念仏を修することについて次のように述べている。

無事ニ。身間ナル者ノハ。時時ニ勤念シ有テ事纏レ身ニ者ノハ早晚ニ課念シ至心 發願シテ求メヨ。生ニセン <sup>1</sup> ヲ淨土ニ。平日遇 <sup>1</sup> ハ福ニ便 <sup>1</sup> 作 <sup>1</sup> セテ訖 <sup>1</sup> 還 <sup>1</sup> 念 <sup>1</sup> セヨ。即以 <sup>1</sup> テ 所作ス之福ヲ迴 <sup>1</sup> 向 <sup>1</sup> シテ淨土ニ。求 <sup>1</sup> 願 <sup>1</sup> セヨ。往生 <sup>1</sup> ヲ。善人受持 <sup>1</sup>	念佛 千聲填一圏。白黃紅青黑。可填五次 無事身間者。時時勤念。有事纏身者。早晚課念。至心發願。求生淨土。 平日遇福便作。作訖還念。即以所作之福。迴向淨土。求願往生。善人 (某甲) 受持 <sup>16</sup>
--	---

つまり「平静安穩のうちに身を持つ間の者は、時間ある毎に念仏を勤め、何か事があつて苦悩に繫縛された者は朝晩に念仏して至心に發願して淨土に往生することを求めよ。平日福德をなす機会に遇えば、それをなす。なしおわたつたならば振り返つてその福德を憶念せよ。そしてなした福德を淨土に回向して往生することを求願せよ」と述べている。

株宏の表題には「念仏を千遍称えるごとに一圏を白、黄、紅、青、黒の五彩で順次塗りつぶすべし」と述べている。そのようにして念仏図説の「〇」



を全部うめると百万の念仏行を成就したことになる。この念仏は浄土往生のためであり、煩惱のために苦しむ人は至心に発願して往生を願うべきことをすすめている。五色について言えば、密教は万物を構成する五大(五大原質)を、地大(黄、水大(白、火大(赤、風大(黒、空(青という色彩に配当している。そこには地(増益性、水(洗浄性、火(親愛性、風(払拭性、空(包摂性という象徴性が含意されているという。獨湛がいう五色にも、こうした色彩の象徴性が念仏図説にも反映しているのかもしれない。

次に株宏の『山房雜録』にある「骷髏圖説」が引用されている。

骷髏圖説

傅大士云。漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鐘。假饒金玉滿堂。難

免生老病死。任汝千般快樂。無常終是到來。

惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。

大士此語。正所謂萬般將不去。惟有業隨身者也。

如何是萬般將不去。人生所有官爵。金寶。屋宅。田園。

飲食。衣服。玩好。乃至嬌妻。愛子。無常到來。

那一件是將得去者。如何是惟有業隨身。

人生所造諸貪嗔。癡。業。非禮姦姪。

恣意宰殺。為子逆父。為臣欺君。剋衆成家。

陰毒害物。種種惡業。無常到來。

這都緊緊隨著你者。既然如是。

若不猛省回頭。改惡從善。洗心念佛。

豈非徒得人身。虛生浪死苦哉苦哉。

傅大士云。漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鐘。假饒金玉滿堂。難

免生老病死。任汝千般快樂。無常終是到來。

惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。

大士此語。正所謂萬般將不去。惟有業隨身者也。

如何是萬般將不去。人生所有官爵。金寶。屋宅。田園。

飲食衣服。玩好。乃至嬌妻。愛子。無常到來。

那一件是將得去者。如何是惟有業隨身。

人生所造諸貪嗔癡業。非禮姦姪。

恣意宰殺。為子逆父。為臣欺君。剋衆成家。

陰毒害物。種種惡業。無常到來。

這都緊緊隨著你者。既然如是。

若不猛省回頭。改惡從善。洗心念佛。

豈非徒得人身。虛生浪死苦哉苦哉。

すなわち、「傅大士(四九七〜五六九)は、加齢と共に皺がふえ膚は鶏の皮のようになり、白髪がふえて頭は鶴のように白くなる。しだいに年老い

て疲れ病んで歩くことが困難になる。たとえ金や玉が堂に満ちていても、生老病死から免れることはできない。たとえあらゆる快樂を過ごしていても、無常はついにおとずれる。生死を離れるにはただ一つの径路がある。それは阿彌陀仏を専ら念じることである。<sup>20</sup>と述べている。この大士の所説は正に、いわゆる世俗のものを持ち去ることはできないが、ただ業のみ身に随うと言うことである。なぜ世俗のものを持ち去ることはできないであろうか。人生にはあらゆる官位、宝物、家、園田、飲食、衣服、骨董、そして愛妻、愛子などが付随するが、無常が到来すると、どれも持つて去ることができない。どのような業が、身に随うのかといえれば犯した諸の貪瞋癡の業、非礼姦淫、恣意宰殺、そして子として父に逆い、臣として君を欺き、不正な行為で他人の財産を奪って自分の財産を作る、陰毒で物を害するなどの種々の悪業は、死が訪れたらすべてすっかりとあなたに付き従うものである。もし激しく顧みなくても、考えを変え、悪を改め、善にしたがい、洗心して、念佛すれば、どうして人の身を得たのに、虚しく生死を流浪することなどあるうか。苦であろうか。そんなことになれば苦であろう」と述べている。つまり生前の所有物は死後にまで付き従うことはないが、悪業は間違いなく付き随ってその人を苦しめる。そこから解き放つものが改悪徒善洗心念仏であるというのである。

この対照から桂鳳が指摘するように獨湛は『勸修作福念仏図説』を株宏の『山房雜録』を拠り所として作成したことが分かる。ただし「傳大士云」の偈は同じ株宏の著作である『往生集』そして『阿彌陀經疏鈔』の故事熟語の典故を示した『阿彌陀經疏鈔事義』には善導(六一三―六八一)のものとしている。

この偈文は宋代の王日休の『龍舒増廣淨土文』巻第五、宗曉(一一五一―一二一四)の『樂邦文類』巻第五等にも善導の偈文と伝えられている。

また阿彌陀仏を信仰し、白蓮社に道友もあつた臨済宗楊岐派の中国僧齊巳(一一一八―一一八六)は蓮社会の道友に上堂を請うと同じ偈文をあげて、しかも善導から受けたものであると述べている。

次にこの偈文が見られる最古の典拠となる『龍舒増廣淨土文』をはじめ八つ著作をあげて対照すると次のようになる。

山房雜錄	龍舒增廣淨土文 卷第五	樂邦文類 卷第五	佛祖統紀 卷第二十六	往生集	阿彌陀經疏鈔 事義	續傳燈錄 卷第三十一	彌陀經疏鈔 義卷一
雲棲株宏	王日休撰	宗曉編次	志磐撰	雲棲株宏	雲棲株宏	慶元府東山齊已禪師。邳州謝氏子。上堂。舉蓮社會道友請上堂。	古德文賢
傅大士云。	東京師僧善導	京師比丘善導頌	法師善導	善導和尚	徑路修行	漸漸雞皮鶴髮。父少而子老。	龍舒居士王日休。作淨土文。無盡居士張商英。作求生淨土文。侍郎王古。作直指淨土決疑集。吳群沙門大佑。作淨土指歸集。無功居士王闡。作淨土自信錄。慈雲懺主遵式。作淨土略傳。善導和尚。作偈。偈云
漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。難免生老病死。任汝千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	其勸化偈云。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。難免衰殘老病。任是千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	其勸偈曰。	其勸世偈曰。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。豈免衰殘病苦。任汝千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。疑殺木上座。直饒金玉滿堂。照顧白拈賊。豈免衰殘老病。正好著精彩。任汝千般快樂。渠儂合自由。無常終是到來。歸堂喫茶去。唯有徑路修行。依舊打之遶。但念阿彌陀佛。念得不濟事。念得不濟事。復曰。啞這條活路。已被善導和尚直截指出了也 <sup>27)</sup>	龍舒居士王日休。作淨土文。無盡居士張商英。作求生淨土文。侍郎王古。作直指淨土決疑集。吳群沙門大佑。作淨土指歸集。無功居士王闡。作淨土自信錄。慈雲懺主遵式。作淨土略傳。善導和尚。作偈。偈云
漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。難免生老病死。任汝千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。難免衰殘老病。任是千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。難免衰殘老病。任汝千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。豈免衰殘老病。任是千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。豈免衰殘病苦。任汝千般快樂。無常終是到來。惟有徑路修行。但念阿彌陀佛。	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。疑殺木上座。直饒金玉滿堂。照顧白拈賊。豈免衰殘老病。正好著精彩。任汝千般快樂。渠儂合自由。無常終是到來。歸堂喫茶去。唯有徑路修行。依舊打之遶。但念阿彌陀佛。念得不濟事。念得不濟事。復曰。啞這條活路。已被善導和尚直截指出了也 <sup>27)</sup>	漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鍾。假饒金玉滿堂。疑殺木上座。直饒金玉滿堂。照顧白拈賊。豈免衰殘老病。正好著精彩。任汝千般快樂。渠儂合自由。無常終是到來。歸堂喫茶去。唯有徑路修行。依舊打之遶。但念阿彌陀佛。念得不濟事。念得不濟事。復曰。啞這條活路。已被善導和尚直截指出了也 <sup>27)</sup>	龍舒居士王日休。作淨土文。無盡居士張商英。作求生淨土文。侍郎王古。作直指淨土決疑集。吳群沙門大佑。作淨土指歸集。無功居士王闡。作淨土自信錄。慈雲懺主遵式。作淨土略傳。善導和尚。作偈。偈云



右の対照から明らかのように、この偈文を傳大士のものとしているのは『山房雜錄』のみである。しかも同じ株宏の著作の中でも当偈文は善導のものであると見られており、従ってこの偈文は中国仏教では傳大士つまり善慧大士の偈文ではなく、善導ものとして伝承されていたことが分かる。諸本によって多少の文字の異動が見られるが、その内容は変わらない。ではなぜ株宏は傳大士のものとしたかが問題となる。おそらく最初は「善導」を「善慧」と誤り、後に善慧を傳大士としたと思われる。つまり獨湛は『勸修作福念仏図説』の長文の記述にこの偈文を傳大士とする『山房雜錄』を引用しているのである。さらに次のように文が続く。

<p>我レハ觀<sub>レ</sub>テ世人<sub>一</sub>箇箇皆好<sub>シ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。今<sub>三</sub>等<sub>ニ</sub>列<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。一<sub>ニ</sub>ハ者<sub>ハ</sub>極<sub>ニ</sub>閑<sub>ノ</sub>人<sub>。</sub>      應<sub>ニ</sub>當<sub>シ</sub>無<sub>ク</sub>晝<sub>無</sub>夜<sub>。</sub>一心<sub>ニ</sub>念佛<sub>一</sub>。      二<sub>ニ</sub>ハ者<sub>ハ</sub>半<sub>ニ</sub>閑<sub>ノ</sub>半<sub>ニ</sub>忙<sub>ノ</sub>人<sub>。</sub>應<sub>ニ</sub>當<sub>シ</sub>營<sub>ミ</sub>事<sub>ヲ</sub>已<sub>テ</sub>畢<sub>。</sub>即便<sub>ニ</sub>念佛<sub>一</sub>。三<sub>ニ</sub>ハ者<sub>ハ</sub>極<sub>ニ</sub>忙<sub>ノ</sub>人<sub>。</sub>      應<sub>ニ</sub>當<sub>シ</sub>忙<sub>レ</sub>裏<sub>ニ</sub>偷<sub>レ</sub>間<sub>ヲ</sub>十<sub>ニ</sub>念<sub>ニ</sub>念佛<sub>ス</sub>。      又復<sub>ニ</sub>富<sub>貴</sub>之人<sub>。</sub>衣<sub>レ</sub>祿<sub>ニ</sub>豐<sub>ニ</sub>足<sub>。</sub>正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。貧<sub>窮</sub>之人<sub>。</sub>安<sub>レ</sub>貧<sub>ヲ</sub>守<sub>レ</sub>分<sub>ヲ</sub>。      正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。有<sub>ニ</sub>子<sub>孫</sub>人<sub>。</sub>得<sub>ニ</sub>人<sub>ノ</sub>替<sub>力</sub>。正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。      無<sub>ニ</sub>子<sub>孫</sub>人<sub>。</sub>心<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>牽<sub>掛</sub>。正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。      無<sub>病</sub>之人<sub>。</sub>身<sub>力</sub>康<sub>健</sub>。正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。有<sub>病</sub>之人<sub>。</sub>      知<sub>レ</sub>死<sub>不</sub>久<sub>。</sub>正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。      聰<sub>明</sub>之人<sub>。</sub>通<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>達<sub>レ</sub>理<sub>。</sub>正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。愚<sub>鈍</sub>之人<sub>。</sub>無<sub>ニ</sub>雜<sub>ノ</sub>知<sub>見</sub>一<sub>。</sub>      正<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>念佛<sub>スルニ</sub>。以<sub>テ</sub>要<sub>言</sub>之<sub>ヲ</sub>。      天<sub>上</sub>人<sub>間</sub>。四<sub>生</sub>九<sub>有</sub>。皆<sub>當</sub>念<sub>佛</sub>。奉<sub>勸</sub>世<sub>人</sub>一<sub>。</sub>      何<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>此<sub>下</sub>四大<sub>未</sub>作<sub>レ</sub>骷<sub>髏</sub>時<sub>。</sub>早<sub>早</sub>念<sub>佛</sub>。直<sub>待</sub>萬<sub>般</sub>將<sub>不</sub>去<sub>。</sub>      惟<sub>有</sub>業<sub>隨</sub>身<sub>。</sub>懊<sub>悔</sub>無<sub>及</sub>了<sub>也</sub>。</p>	<p>我觀世人。箇箇皆好念佛。今三等列之。一者極閑人。      應當無晝無夜。一心念佛。      二者半閑半忙人。應當營事已畢。即便念佛。三者極忙人。      應當忙裏偷閒。十念念佛。      又復富貴之人。衣祿豐足。正好念佛。貧窮之人。安貧守分。      正好念佛。有子孫人。得人替力。正好念佛。      無子孫人。心無牽掛。正好念佛。      無病之人。身力康健。正好念佛。有病之人。      知死不久。正好念佛。      聰明之人。通經達理。正好念佛。愚鈍之人。無雜知見。      正好念佛。以要言之。      天上人間。四生九有。皆當念佛。奉勸世人。      何不趁此四大未作骷髏時。早早念佛。直待萬般將不去      惟有業隨身。懊悔無及了也。<sup>20)</sup></p>
---	---

すなわち「私が世の人を觀察してみると、一人ひとりが皆それぞれに念佛するのがよい。今念仏する人を三類に分けてみる。一つには大いに暇のあ

る人は一日中一心に念佛すべきである。二にはある程度忙しい人は仕事を終えてから念仏すべきである。三には極めて忙しい人は忙しい中に時間をたっぷり十念の念仏するのがよい。

また富貴の人は豊富な衣禄をもつても、まさに念仏するのがよい。

貧窮の人は貧に安じて自らの分を守って、まさに念仏するのがよい。

子孫のある人は仕事の手伝いをする人がいるので、まさしく念仏するのがよい。

子孫のない人は懸念することがないので、まさに念仏するのがよい。

病氣のない人は健康のうちにまさに念仏するのがよい。

病氣のある人は死が近づいていることを知るから、まさに念仏するのがよい。

聡明の人は、仏教の道理等に精通するので、まさに念仏するのがよい。

愚鈍の人は、粗雑な知見がないので、まさに念仏するのがよい。

要するに、天人、人間、四生、九有、すべて念仏すべきである。

世の人に勧め申し上げる。なぜ生きているうちに、念仏しないのか。どうして地水火風の四大から成る身がまだ骷髏とならない時を以て早々に念仏しないのか。ただ世俗のあらゆることさらに追隨するようなことをすれば、まさに生死を去ることはできない。臨終の時には業のみが身に随うので後悔しても遅い」と述べている。ここではまづ衆生の生活の閑忙に即して念仏者を三類に分けているが、全てのものはそれぞれの生活実態に即して念仏すればよいことが述べられている。それに続いていろいろな生活形態、また機根の諸相を挙げながら、全ての者がそれぞれの場で念仏すればよいことを強調している。

また長文の最後には獨湛の次のような識語がある。

此ノ図於ニ震旦ニ行レ世ニ已ニ久シ矣。至ニ大清康熙年中ニ。奉テ旨ヲ頒ニ行テ天下ニ普ク勸ニ化ス念佛ヲ。豫得ニ一張ニ與ニ無塵居士ニ奉持居士以テ日國未ル有ニ此図一。今鐫刻流通。令メ天下ノ人ヲ念佛修福シ同ク生ニ浄土ニ則利益無量ナリ焉。メ念仏千声ニ填ニ一圏ヲ。白黄紅青黒可レ填ニ五次ニ。寶永甲申重陽支那獨湛瑩識号子柿普勸定仏往生墨印。

つまり、「この念仏図説は中国では昔から用いられており、大清の康熙帝（一六六一―一七二二在位）の年中に至って、詔旨をうけて図説を世に刊行して、普く念佛を勸化することになった。予め得ていた一枚を無塵居士にあたえ奉持した。居士はまだ日本にこのような図はないといって、今鐫刻して流通することになった。天下の人に念佛させて福を修して浄土に往生させれば、その利益は無量である。念仏を千声ごとに一圈を塗りつぶし、白

黄紅青黒の五色順に塗りつぶすようにすればよい。宝永甲申（一七〇四）重陽（九月九日）支那独湛鑿識（印【獅子林普勸定仏往生】）とあるように、獨湛の念仏図説は義山の道友である無盡居士によって普及されたのである。なお三版以降より図説の最下部には忍澱（一六四五〜一七一）の識語が付されている。それは次のようなものである。

黄檗四世独湛老和尚 佩<sup>ヲ</sup>西来直指<sup>ヲ</sup>心印<sup>ヲ</sup>而以<sup>テ</sup>淨土<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>歸宿<sup>ノ</sup>之地<sup>ト</sup>。恒持<sup>テ</sup>佛号<sup>ヲ</sup>息不<sup>ニ</sup>虚<sup>ク</sup>。禪誦禮懺<sup>ヲ</sup>嘗<sup>テ</sup>暫<sup>ク</sup>停<sup>ム</sup>。可<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>永明角虎<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>禪<sup>ナリ</sup>也。衰朽<sup>已</sup>而無<sup>ク</sup>微疾<sup>一</sup>身心怡悅<sup>シテ</sup>常<sup>ニ</sup>面<sup>レ</sup>西<sup>ニ</sup>坐<sup>ス</sup>。正月廿四日語<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>昨夜神<sup>ニ</sup>遊<sup>シ</sup>淨土<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>奮<sup>ツ</sup>起<sup>リ</sup>。礼<sup>ス</sup>西方<sup>ヲ</sup>十一拜<sup>ヲ</sup>廿五日<sup>ノ</sup>晚<sup>ニ</sup>鶴声<sup>ヲ</sup>聞<sup>ク</sup>于<sup>テ</sup>天<sup>ニ</sup>。一<sup>ノ</sup>小侍者怪<sup>シテ</sup>而趨<sup>リ</sup>庭<sup>ニ</sup>。則<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>空中微妙<sup>ノ</sup>樂音<sup>ヲ</sup>。其夜深更<sup>師</sup>日適<sup>夢</sup>蓮華<sup>ノ</sup>生<sup>ニ</sup>于<sup>テ</sup>池<sup>ニ</sup>。西帰<sup>ノ</sup>之期<sup>不</sup>遠<sup>カラ</sup>。即<sup>ニ</sup>書<sup>レ</sup>偈<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>我<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>句<sup>一</sup>別<sup>ニ</sup>于<sup>テ</sup>大衆<sup>ニ</sup>。若<sup>シ</sup>問<sup>ハ</sup>何<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>說<sup>フ</sup>。不<sup>レ</sup>說<sup>フ</sup>廿六日<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>常<sup>ニ</sup>面<sup>レ</sup>西<sup>ニ</sup>辰<sup>ハ</sup>刻<sup>自</sup>ラ結<sup>テ</sup>定<sup>印</sup>ヲ寂然<sup>タリ</sup>。侍者連<sup>リ</sup>喚<sup>フ</sup>和尚<sup>ト</sup>師<sup>即</sup>應<sup>レ</sup>声<sup>ニ</sup>念佛<sup>シテ</sup>泊然<sup>トシ</sup>坐<sup>脱</sup>ス。今年七十有九也。日課<sup>彌陀經</sup>四十八卷<sup>禮</sup>。佛三百或五百其<sup>ノ</sup>餘<sup>ノ</sup>禮誦<sup>簿</sup>所<sup>レ</sup>記<sup>スル</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>勝<sup>テ</sup>數<sup>ヲ</sup>。寶永丙戌仲春<sup>獅子谷信阿</sup>謹誌<sup>③</sup>。

つまり獨湛は西来の直指の心印（仏心印）を身に帯び、淨土を帰宿の地とし、つねに仏号を持って息を虚しく通わすことなく、禪語録を誦誦し、礼懺を怠ることがなかった。それは永明角虎（九〇四〜九七五）の禪風であるということができる。老いによる衰朽はすでに極まっているが、軽い苦しみもなく身心は喜につつまれ、常に西に面して坐す。正月二十四日に、昨夜は淨土に逍遙したと語り、氣力をこめて立ちあがり、西方に向かって十一拜した。二十五日の晩には鶴の声が天から聞こえた。弟子は怪しんで庭に赴いたが、空中に微妙の音楽を聞いた。その夜中に師獨湛は蓮華が池に生ずる夢をみて、西帰の時はもう遠くないと言つて偈を作した。それは「我に一句あり、ここで大衆と別れる。もしどのような句と問われたら、不説不説。二十六日常のように西に面し、辰の刻に自ら定印を結んで寂靜の境に入った。弟子たちが和尚と喚ぶと、師はその声に應じて念仏して坐つたまま寂した。七十九歳であった。日課として『阿彌陀經』を四十八卷、仏を礼すること三百あるいは五百、その余の礼誦は日課簿に記録するも数えきれないほどである。寶永丙戌（一七〇六）仲春（二月）獅子谷信阿（忍澱）謹誌、と忍澱は獨湛の臨終について伝えている。

獨湛によつて喚起された、日本における念仏図説印施の最初と思われるのは雲洞の『丈六弥陀蓮會講百万念仏図説』である。それ以降も獨湛の図説の影響を受けた多くの念仏図説が印施され、日本においては二百年にわたつて念仏図説を用いての念仏教化がなされたのである。次にその一端を取り上げてみたい。

まず、祐天寺藏板の香譽祐海（一六八二〜一七六〇）『勸修百万遍十界一心願生西方作福念仏図説』がある。これは上段に當麻曼陀羅の上品上生の弥陀三尊を配し、その左右に長文<sup>③</sup>を置いている。弥陀三尊の下段の蓮池に「上品中生」、「上品下生」、「中品三生」と「下品三生」という文字が蓮台の上に書かれ、九品を表している。中央には光を放つ「心」の文字が蓮台の上に描かれ、その蓮の茎は更に下段の図に記されている「一心」に繋がっている。下段の図の下部には円形があり、円形の上半には二河白道が描かれ、下半には此土が描かれている。その「一心」は白道の手前入口に書か

れ、円形の中心に配置されている。円形の外縁、上部には右左に二十五菩薩の来迎が描かれ、弥陀は右上に配され、円形の外縁、下部右下には釋迦が描かれている。円形の上縁には増上寺第三十六世祐天の名号が配置され、その下に「願往生」と記されている。下段の図の外、左右の縁と下の縁には「十界図」が配置されている。その「十界図」は宋時代に流行した遵式(九六四〜一〇三二)に始まると言われる『円頓観心十法界図』<sup>33</sup>である。円形の下半(此土)から十本の線で「十界図」の各界と繋がっている。図の左下には「享保年中 武蔵明頭山二世祐海識」とある。享保年中は一七一六〜一七三六年に当たる。各場面のまわりには「○」が配置されており、獨湛の図説のように念仏を称えて塗りつぶすようになっていて<sup>34</sup>。

次に『勸修作福百万遍二世安楽図説』は中央に立像の弥陀三尊と往生者を描き、その上段に横書きで「勸修作福百万遍二世安楽図説」と記されている。右縁には『観無量壽經』の上品上生の経文を記されている。左縁には獨湛の詩を四首を載せ、下縁には銀椀鏡の識語がある。その識語によれば、図は黄檗獅子林にあること、また『勸修作福念仏図説』に忍激が寄せた識語を参考にして獨湛の浄土教と獨湛の臨終について述べている。その中に「昼夜口称三昧<sup>35</sup>而全如<sup>36</sup>円光大師<sup>37</sup>」と、獨湛の口称三昧は法然のようであると述べている。また『法然上人行状絵図』第二三巻に説く百萬遍と一念の念仏に関する箇所を抜出しているこの図の周りにも「○」が配されている。

次に天性寺印施の念仏図には標題はない。中央に上品上生の阿弥陀仏が配され、その下段にある蓮池の蓮台には往生者の名を記す白い札が置かれている。図の周囲には「○」千個、四列に配置されている。図の枠には「念仏一遍んをもって此圈一ツをうづみ、四辺うづみおはれば千べんとなる。十遍んにて一ツうづめハ一万べん、百べんをもってすれバ十万遍んなり、千べんなれば百万べんとなる也。」と記されている<sup>38</sup>。

また『善導法然の来迎図』<sup>37</sup>はその板木が増上寺に所蔵されているが、白黒二色刷りのものである。同じものが龍谷大学に所蔵され『阿弥陀如来二十五菩薩来迎図』<sup>38</sup>として知られ、色彩が施されている。構成として、図の上段に「一紙小消息」が記されている。図の左上には阿弥陀仏と二十五菩薩の来迎が描かれている。二十五菩薩の右下には富士山があり、富士山の右上には雲の上に乗った日輪が描かれ、左上には雲に乗った月が描かれている。来迎図の左下には義賢(一七八六〜一八四二)の名号を挟んで善導と法然の二相對面が描かれている。富士山の下段には横臥して合掌している往生人と傍らに善知識となる僧が描かれている。阿弥陀仏の白毫から三本の光が放たれ往生人を照らしている。

この図説の作者は義賢と見なされている。浄土宗の遊行僧である義賢は江戸白金町正源寺(浄土宗)から富士山麓に赴き天保九年から十一年の間修行した日誌が富士山の麓の神社に所蔵されている<sup>39</sup>。『加賀藩資料』第十五編によると、天保十一(一八四〇)年九月二十五日「念佛行者金澤に来る」の条には、

文月のこ、の日といふ日より彼名に高きたち山へ籠り、念佛供養のため大願を起し、凡四十八日といふ計も籠り給はん御志にて、此大山の浄土山といふへのぼらせ給ひ、念佛し籠り給ふ、三七日といふにはや其願成就ならせたまひて、富山の巷へをりさせたまひ、此大城の下にて日課念佛

の供養授け給ふ。

とある。義賢は江戸から出て立山に籠って念仏し、そして遊行した所では日課念仏を授け、念仏教化をしていたのである。この図の左側に百一の「〇」が縦に配され、一万遍ごとに一つの「〇」を塗りつぶせば全部で百二万遍の念仏を称えたことになる。これも獨湛が普及した念仏図説の影響であると考えられる。

また獨湛図説による念仏勧導について珂然の『新聞顕驗往生伝』上、法雲信尼の項には「清倫、阿尼（雲生・妙閑）に謂て曰く、法雲尼公、嘗て世に在りし時、屢我を勧誘して公出家せよと言えり、其の恩に酬いんが為に、獨湛和尚の流通する所の念仏図説を得て（中略）一百日を期して百万遍の念仏を修す。」<sup>(41)</sup>とあり、さらに清浄智信士の項には「俗の名は武右衛門、洛東知恩院古門前に住す、槽匠を業となし、早く西方を慕ひ意を浄業に切にす、誓願寺に詣し阿弥陀仏を礼し、往生を祈求することは凡そ十八年、未だ嘗て廢置せず、又獨湛和尚に従て念仏図説を稟け、百万遍を修することは凡そ四過」<sup>(42)</sup>とある。また雲靈桂鳳編纂『現証往生伝』の了雲法師の項には、「宝永二年ノ春、黄檗獨湛禪師、肇て作福念仏ノ図説ヲ本邦ニ印施弘通シ玉フ、法師是ヲ聞テ希有ノ想ヒヲ生ジ、則図説六張ヲ乞請ヌ、茲ニ於テ、身器清浄ニシテ仏前ニ跪坐シ高声念仏シ、不日ニシテ六百万遍ヲ成就シ、往生極楽ノ資糧ニ回向ス」<sup>(43)</sup>とあり、獨湛図説が江戸中期に念仏の勧導に盛んに用いられたことがうかがわれる。

このように獨湛は雲棲株宏の影響の下に念仏の教化のため『勧修作福念仏図説』を作成し、それを日本にはじめて紹介し、江戸期の浄土教に大きな影響を与えたのである。

#### 〔注〕

(1) 禿氏祐祥稿『念仏図の起源並に伝播』（龍谷史壇第二卷第一号）一九二九年内。

(2) 大賀一郎稿「念仏四代念仏獨湛和尚について」（念仏と禪 浄土学特輯）内、松永知海稿「『勧修作福念仏図説』の印施ト影響―獅谷忍激を中心として―」（『佛教大学大学院研究紀要』第十五号内）

(3) 重刊については大賀前掲論文には九版と指摘されているが、松永前掲論文では印施は十回であったと指摘している。それは次のようである。

第一版宝永元年（二七〇四）九月	黄檗獅子林
第二版〃十一月	〃
第三版宝永三年（二七〇六）二月	獅谷法然院
第四版宝永六年（二七〇九）冬	
第五版享保七年（二七二二）正月	浜松大雄庵
第六版明和八年（二七七二）春	洛東雲蓋院
第七版安永七年（二七七八）春	黄檗獅子林



第八版明治三十二年(一八九九)二月 姫路雲松寺

第九版大正六年(一九一七)三月 黄檗三十三開戒紀念

第十版昭和六年(一九三一)十二月 名古屋黄檗堂

(4) 禿氏論文、大賀論文、松永論文、長谷川匡俊著『近世浄土宗の信仰と教化』「黄檗宗の念佛独湛」一九八八年

(5) 『大正蔵』四九卷284c

(6) 『大正蔵』四九卷285c、雲棲株宏は『往生集』卷之二に「宋計公。四明桃源鐵工也。年七十。兩目喪明。里中咎學論。以擘窠圖印施。勸人念佛。計公初受一圖。念滿三十六萬聲。念至四圖兩目瞭然。如是三載。念滿十七圖。一日念佛忽氣絕。半日復蘇曰。佛令分六圖與咎學論。是勸導之首。分一圖與李二公。是依圖之人。囑其子往謝之。言訖沐浴西向而化。」(『大正蔵』五一卷236c)とあげている。

(7) 禿氏論文。

(8) 明代の慈山徳清禪師。(一五四六〜一六二三)の語録である『慈山老人夢遊集』卷第三十一には次のようである。「題普念佛求生浄土圖 世人歴劫。久沉<sub>レ</sub>生死苦海。輪迴<sub>三</sub>途<sub>一</sub>。皆因<sub>三</sub>自心妄想煩惱<sub>一</sub>。造<sub>三</sub>種種業<sub>一</sub>。故無<sub>三</sub>出頭之時<sub>一</sub>。佛說<sub>三</sub>西方浄土一門<sub>一</sub>。引<sub>三</sub>攝衆生<sub>一</sub>出<sub>三</sub>離苦趣<sub>一</sub>。是為<sub>三</sub>最妙法門<sub>一</sub>。一生取辦。楚僧海慧。單勸<sub>三</sub>十方真實為<sub>レ</sub>生死人<sub>一</sub>一心念佛。更無<sub>三</sub>別緣<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>衆生煩惱深重<sub>一</sub>。妄想甚多。皆生死根。然<sub>レ</sub>非<sub>三</sub>多多之佛<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>度<sub>三</sub>多<sub>三</sub>多<sub>三</sub>之人<sub>一</sub>。今聞<sub>三</sub>汝東居士。刻<sub>レ</sub>接引彌陀佛像一尊。通身約<sub>三</sub>圈一千八百<sub>一</sub>。每念佛千聲。以<sub>レ</sub>朱填<sub>三</sub>一<sub>レ</sub>圈。念<sub>三</sub>完佛身<sub>一</sub>。則計念佛一百八十萬聲。雖<sub>レ</sub>積<sub>三</sub>劫百八煩惱<sub>一</sub>。仗<sub>レ</sub>佛消除。而浄土可<sub>レ</sub>期。生死之苦可<sub>レ</sub>永脫矣。且願所勸<sub>三</sub>念佛之人<sub>一</sub>。亦如<sub>三</sub>念佛之數<sub>一</sub>。更望<sub>三</sub>大信心檀越<sub>一</sub>。施<sub>レ</sub>紙印<sub>レ</sub>散亦相若。惟此功德圓滿。則施者念者。同歸<sub>三</sub>極樂<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>疑矣。(『正新纂續藏經』第七三冊686a)

(9) 『蓮会百万念仏図説述贊』刊本、享保十九年、佛敎大学図書館所蔵

(10) 長谷川匡俊著『近世念仏者集團の行動と思想・浄土宗の場合』、藤堂俊英稿「宋・日の蓮華勝会」(『香川孝雄博士古稀記念論集 佛敎学浄土学研究』内)

(11) 『蓮会百万念仏説述贊』卷上二丁左(佛敎大学図書館所蔵)

(12) 『貞傳上人東域念佛利益傳』佛敎大学図書館所蔵

(13) 『貞傳上人東域念佛利益傳』下二十二丁

(14) 『蓮池大師全集』卷四(和裕出版社(台湾)内)。

(15) 『蓮池大師全集』卷四433、『雲棲浄土彙語』(『正統蔵』六二卷9c08)

(16) 父母に孝順し、君主に中報し、仏像を装塑し、經典を印造し、僧伽を齊供し、寺宇を榮修し、善法を流通し、宰殺を禁絶し、生命を買放し、饑民に飯食し、寒凍に衣斎し、義井を開掘し、橋梁を修理し、街道を平砌し、茶湯を普施し、病人を看病し、薬餌を給散し、冤枉を伸雪し、刑罪を出減し、衰老を安養し、孤孩を撫育し、屍骨を埋蔵し、棺木を給与し、債負を饒免し、財産を義讓し、他の遺失せしを還し、患苦を救済し、災難を祈禳し、亡鬼を薦拔し、争訟を勸和し、人命を生全す。

(17) 『蓮池大師全集』卷四433、『雲棲浄土彙語』(『正統蔵』六二卷9c08)

(18) 『蓮池大師全集』卷四433、『雲棲浄土彙語』(『正統蔵』六二卷9c23)

(19) 禿氏論文には「記数法の必要は浄土教に於けるよりも密敎にては更に痛切であるから、念仏図説の如きは密敎に行われたものを借用したのであらうと思ふ。密敎では陀羅尼の念誦に一定の数が設けられ、勝手に増減することを許さないのである。」とある。宮坂宥勝稿「密敎における色の役割」『panoramic』

magis』増刊号「色」ポーラ文化研究所 昭和五十七年。また五色といえ、臨終行儀の際に用いられた仏と往生者を結び繋ぐ糸も五色であったことを想起できる

五輪念佛

南無阿弥陀仏

抜苦與樂



- 栃木県には日光山寂光寺の覚源上人が伝えた五輪の札がある。貞傳の『東域念仏利益傳』巻下には「文明年中野州日光山寂光寺ノ覺源上人俄ノ死ノ至ル于冥府ニ閻王命ノ令ム歴覽セ地獄ノ既ニ而出ツ五輪ノ圖ヲ告テ上人ニ曰罪惡ノ衆生死レ此ニ時先ノ釘一身支節四十九所ニ其苦不レ可言若シ有ニ男女一為ニ稱ニ阿彌陀佛ノ名號四十九萬遍ノ填ニ五輪塔中ノ圈ヲ至誠ニ回向スレハ亡者離レテ苦ヲ必ク生ニ淨土ニ若シ其善者ナレバ受テ此ノ功德ヲ増ニ長ニ善根ヲ超ニ生ス上品ニ上人還テ陽間ニ當テニ語ニ此ノ事ヲ普ク救フ衆生上ニ乃チ授ク五輪念佛圖ヲ上人蘊生ノ其ノ圖在リ于掌中ニ爾シヨリ來タ諸人毎ニ値ニ亡者ノ中陰ニ依ニ此ノ圖ニ念佛追福スル者屢有リト靈驗ニ云」(佛敎大学所蔵二十丁)とある。この五輪念仏の札、釘念仏とも知られ、仏敎大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究 資料編』39にとりあげている。
- (20) 牧田諦亮著『浄土仏敎の思想 五 善導』102参照。
- (21) 『蓮地大師全集』第四卷328株宏(一五三二)～一六一三)
- (22) 『大正蔵』四七卷566c(一一六一)年成立
- (23) 『大正蔵』四七卷219a 一一〇〇年成立
- (24) 『大正蔵』四九卷263b 一一二九)年成立
- (25) 『大正蔵』五一卷130b 【典拠は『佛祖統紀』なり】
- (26) 『正統蔵』一一卷687b
- (27) 『大正蔵』五一卷683a 一三六八)一九三八頃成立
- (28) 『正統蔵』二十二卷730c 文賢(一六三九) 株宏(門下)
- (29) 『蓮地大師全集』卷四(和裕出版社〈台湾〉) p.4330。
- (30) この識語は『獅谷白蓮社忍激上人行業記』巻下十五丁にも記載されている。
- (31) 松永氏は、「雲洞の『念仏図説』は忍激あるいは獨湛あたりの人たちから、念仏図や功過格等を聞いて雲洞自身が考えていたものである。なぜならば雲洞の伝記には忍激を師と仰ぎ求道遍歴する姿が描かれている。さらにその伝記である『雲洞和尚行実』の著者は桂鳳であることによる。法然院の中興二世忍激を師と仰いだ雲洞、さらにその雲洞の師と仰ぐのは法然院の中興第八世の桂鳳という関係が堺の法行寺を中心にまわっているのである。」と述べている。

- (32) 松永論文には全文の翻刻がある。
- (33) 『天竺別集』巻中に『円頓観心十法界図』の図がある。(『正統蔵』五十七卷27)
- (34) 巖谷勝正稿「香誉祐海の『勸修百万遍十界一心願生西方作福念仏図説』について」『佛教論叢』第四十六号
- (35) 松永論文参考。銀碗鏡の識語の全文の翻刻がある。
- (36) 松永論文参考。(佛教学文献センター所蔵)
- (37) 玉山成元稿「善導・法然の来迎図」(『日本仏教史学』第十四号)
- (38) 龍谷大学大宮図書館 二〇〇九年度特別展観『仏教の宇宙観』
- (39) 徳本行者(一七五八―一八一八)と年代であるが、徳本の『応請撰化日鑑』には義賢の名前は見られない。(伊藤曙覧著『越中の民族宗教』参考)
- (40) 伊藤曙覧著『越中の民族宗教』234参考
- (41) 笠原一男編『近世往生伝集成』第二卷、56―57、長谷川匡俊著『近世浄土宗の信仰と教化』384
- (42) 前掲『近世往生伝集成』第二卷71
- (43) 前掲『近世往生伝集成』第一卷86
- (44) 長谷川匡俊著『近世浄土宗の信仰と教化』384―385参照。森三樹三郎著『老荘と仏教』には「黄檗宗には大名の帰依する者が多かった関係で、その妻女たちの間に百万遍念仏を唱えるものが少なくなかった。現に大和郡山の城主柳沢吉保の側室定子の念仏図説が残されているが、それにはこの念仏図説が二十一万八千枚印行された旨が記されている。これらの人は専ら念仏の側面のみを受取った黄檗宗徒とすべきであろう。つまり黄檗宗は、知識人には禪を、大衆には念仏をといて、使い分けをしているのである。」と言っている。大賀論文には「念仏図の重刊 これより二百五十年後の今日に至るまで、黄檗徒浄土とて、この作福念仏図を印施する事六回に及んでいるばかりでなく、大阪天満の善導寺及法界寺では真阿により模倣された別個の消し念仏が印施されている。以て獨湛の作福念仏図説印施の功の大なるを知ることが出来るであろう。現に小圈を五色に施された念仏図をあちこちの寺院に見るが、黄檗真光院には大将軍綱吉の寵を一身に集めた甲斐侯柳沢吉保夫妻の小圈を充填してこれに金色燦爛たる極色彩を施した作福念仏図説が保存されている。」とある。

(たなか みのもる まるこす 文学研究科浄土学専攻研究員)

(指導・藤堂 俊英 教授)

二〇一〇年九月二十九日受理